

佐伯史談

第九十五号

郷土史研究誌
通算第百十七号

昭和四十九年八月九日発行

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稻垣字龍護寺羽柴方

随想

登城・元寇・佐伯言葉

— 佐伯史談第九十四号を読んで —

在大阪
本会顧問 矢田清

佐伯地方はぼつぼつ田植でしようが、今年は雨量少く、番五川の水でも汲みあげねばと案じられる程とか使りにありましたが、田は矢張り鶉の前が主ですか。

昨七日（注六月）正午、佐伯史談誌第九十四号落掌。

提言 佐伯城三の丸櫓門の修復（小野会員）

明治維新の時「すべては御一新」と、徳川期のものは仏寺・仏像に至るまですべて叩きこわしたもので、よくぞ三の丸の櫓門が残ったれですが、日に幾度となくこの櫓門下をくぐり抜けた子供の特い思い出しい三の丸櫓門を永久に保存すべく、櫓門保存会が発足した事は大いに喜ばしいことで、近頃はどこでも観光客集めから、よく復元ということが流行っています、コンクリート製の復元は意味なしです。

旧幕時代、一般武士の登城は辰（午前八時）の刻、重役は巳（午前十時）の刻としたものですが、その辰の刻の太鼓が鳥のたら開城で、それまでは門外の斜面下で、
「お早よう御座る」とか何とか言いながら待っていたものでしよう。

一般下城は申（午後四時）の刻ですが、重役連中はもう二時開早い櫓（午後三時）の刻で、藩の御家老とて違答、早退はよろしからず、
「まだお戻えにならぬ」という時は、太鼓の方が待ったとかいう話です。

然し、この午前八時の登城、午後四時下城という方は、徳川に入つてからで、平安・鎌倉期では朝廷でも卯（午前六時）の刻出勤の午（十二時）の刻退勤で、つまり午後には全然休んで、たらし、当時終日詰めてする程の仕事もなかつたからでしょう。

本号内容

- 随想 登城元寇・佐伯言葉（矢田清）
- 史話 鷲尾城跡を訪ねて（佐野賢二）
- 研究 横川老生と佐伯（山本保）
- 研究 櫓門の古塔を求めて（一九）
- 研究 清水庵・高木寺など（浦丸勇）
- 研究 竹下下の供養塔（休庵）
- 研究 たら貝の遺跡（安部謙吉）
- 絵巻 絵巻に描かれた（一）
- 資料 明治三年の御事（村上実）
- 資料 佐伯の歴史（羽柴方）
- 市史・櫓門、ほか

下見板張り



これは板が下を見るかの

如くに張つてあるからでしようか。この下見板張りは雨風にも強く、また修理も簡単で、白壁にすると大変高くなります。

梁行何間、桁行何間。梁は張で、桁は肩の意とあります。

佐伯氏と元寇(佐脇貫一氏)一福岡と筑紫の国と称するのば、昔から外敵に備えて防塁工事が盛んであったので、本来は築石と書くべき所を、同名だからというので筑紫としたらしく、これは支那の隋が実は四隣を従えるという隋の作り替で、宋と宋家、宋国の宋の字によつて国名故に宋と改めたのと同じことでしょう。私はこの佐脇氏の一文によりまして、

多々良浜へのエミジ その何蒙古勢、
という歌の意味も判った次第ですが、もしかの暴風雨が来なかつたならば、日本も遂には元の属国と化したわけですから、当時の騒動たるや、今人の想像を許さぬものがあつたでしょう。

佐伯方言雑話(山内武麟氏)——やうくる、道化るの義、なる程、道は老子の道德教を指すものですが、それが道化の意に変わるとは。それでは、近畿中国地方では通用せず、もっぱら巫山けるで、巫山戯るは漢の武帝の所へ一タ美女が出現し、沐且何れか女であるかと帝が問うたところ、妾は巫山の仙女なり。朝には雲となり、夕べには雨となると答えた。帝はこれを聞いて、エ、巫山戯るなと言つたことに由来するとありますが、道化役者と言へばア、オドケ役のあれかと全然解らぬでもなく、このオドケも矢張りお道化と書くべき言

築でしよう。

ちよこ、これはどこでも通用する。これは猪の口が体に似合あず小さくて、虎の獅子のようになり口をきいていからでしようか。実際に猪は鼻でせせるだけで、動物園で見ても大きな口を開けないのです。なお江戸で言う猪牙船は、長吉という船大工が工夫したから、本来は長吉船と書くべきであるとの説もありまして、それまでいふよりとも同じ様に縁に四角い底の平たい若舟形式であつたのを、底と水押しとをがらせて舟脚を早くしたもので

猪牙で行くのは、サツサという小唄まで出来ました。

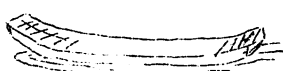
つくむむ、これは方言というよりも古語で、茶道では躰踏と書いてつくばいと読ませ、ランニングのスタート方法でも、これさ躰踏(ツキヨ)式と音読みにして、いますから、正しい古語でしようが、九州では佐伯だけとは——。

つ、こする、これは一般語でもないでしよう。サンダルをつかけと言いますから——。

てがましい、てがましいでは通じませんが、てんごうなら判りまして、ここらへ法(法夜)でも要らぬ事をするなという時には、てんごうするなと此り、手ごうは手合力で、つまり手出しをするなということになります。

なえ、地震の古語でしようが、佐伯でもあまり聞かざ、同じ年寄でも九十から百近いような極く古先でないに使われないです。しかし「わしやあれにやなえたか」というのは、このなえから出たものと思ひます。

なおす、これは修理する、正しく置きなおす、病気をなおす以外には用いらぬ方言で、佐伯地方では主としてしまふ場合に用いる様で、もとの所へ本をなおすなど



は通用しませんから、生徒はキヨトンと書いています。これは牟功臭えでしよう。子供が心得て顔にでんごうしてると、よくこう言つて叱られたものです。

はんど 明治・大正時代まだ水道のない時分には、この家の台所でも必ずこのはんどが一つはあつたもので、私共も毎朝死んだ兄と二人で、にないで大手前の井戸から水を汲んではこのはんどに入れたものです。何故この水がめきはんどと呼ぶかを知りませんが、半斗甕或は半徒甕とも書き、朝鮮ではよくこのはんどに沢山朝鮮漬を仕こむので、或は朝鮮漬かとも思ふのですが、朝鮮では「トツ」と呼ぶ、まあこれは米を半斗も入れる程な大きな壺という意味からでしょう。また半洞とも書いたのがあり、これは大人の半分位という意味からかとも思つています。昔の水汲みの苦勞を思つと、隔世の感がある。実際に、この小学三、四年生の時のにないで水汲みは、六尺が肩にメリにお様で、冬などヨタヨタ歩き、着物の裾に水がこぼれかかり、今の子供はこんな苦勞を知りません。

ふ 「ああ、フがよかつた。本当なら大怪儀をするところじゃった」これは不運のふではないでしょう。また、不図のふかとも思ふのですが、次の「ふとぎらぬ」のふは、胃の腑など云うあの腑の方で、つまり腹の体か間をなしに、次から次へと食ひ散らかすから腑を切らぬで、よく何が何をか分らぬ場合にも、腑に落ちぬと言います。これは腹に入らぬ、呑みこめぬ場合のことで、文字は同じ事となります。

まだ申威の躰の大漁、以下沃出残っていますが後便といたしまして。以上史談誌受領方々。匆々 敬具

史話

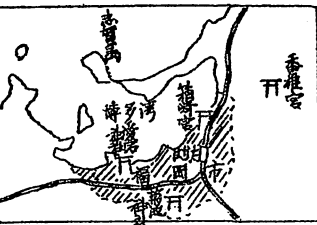
鷲尾城跡を訪ねて

— 博多の神社をめぐる —

会員 佐 脇 貫 一

さる五月二十日、私は福岡市西区の愛宕神社へ正確に鷲尾・愛宕神社に参拝した。それは同神社の鎮座する愛宕山(標高六十二呎)が、昔の鷲尾城址で、元弘三年(一二三三)五月二十五日、鎮西探題として九州各地の守護・地頭にらみ及びきかしていた北条英時が、大友・少弐・島津氏などの連合軍に攻められ、力竭きてこの鷲尾の城館に自殺し、九州における北条氏の覇権が亡んだ史跡であることを知つたからである。

この山は古い時代には鷲尾山といつて、天徳親耳尊・伊弉諾尊を祀る鷲尾神社があつたが、寛永十年(一六三三)時の福岡藩主黒田忠之が山城門の愛宕神を勧請、崇敬したので、以来愛宕山と改めたという。



五月二十二日(元弘三年)大宰少貳妙憲(少貳貞終)一万をひき、探題城に向う。秋月・三原・荻野・味坂(露坂)・神代・江上・小田・高水・國分・龍造寺・千葉・綾部等の郡吏これに従う。大友入道具繼(大友貞宗)五千をひきこれに会す。尹次・白井・田原・新開・佐伯・吉弘・竹搦・紀井・長野等これに従う。」